

年間第21主日

福音朗読 マタイ 16・13-20

2023.8.27 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

クラレチアン宣教会司祭 昌川信雄神父

皆さん、典礼についてご存じだと思いますけれども、第一朗読とこの第三朗読（福音書）はテーマが共通しています。それによりますと、今日の共通テーマは「交代劇」で、相応しくない人に替えて、神さまの傍に置く人として、神さまの心に適った使徒に置き換える、という箇所です。これは、わたしたち一人ひとりのキリスト者にも問われていることです。

さて、人類を救う神さまが計画された救出方法、それは、全体を救うのではなくて、一民族を選び、教育して世界に派遣し、信仰によって全体を救っていくというやり方だったようです。神さまはわたしたちの不従順さえも善に用いて、やがて全体を救いに導かれるお方なのです。

アブラハム以降、イスラエルは、丁度、赤ちゃんの時、お母さんが全てだったのに、成長して少し力がついてくると、一人で大きくなったような顔をして、もはやお母さんが要らなくなる子どものように、イスラエルは神を離れ、不従順によって滅びに向かっていく民族でした。

イエスさまが世に来られたのは、この道を逸れたイスラエルの再教育のためでしたけれども、イエスさまの登場は、教会の指導者、すなわちファリサイ派、サドカイ派たちには受け入れられず、冒涇者として死を意味しました。ですから処刑される前にイエスは弟子の一人に権威を与え、天の国の鍵を渡します。いわゆる、最初のイエスによる「教会刷新」でした。

教会刷新に関しては注意が必要です。それは、新しい教会を造ることではなくて、心のあるリーダーを既存のリーダーに置き換えて教会を正常に戻す、そういう刷新だからです。従わない者は自分のやり方に固執しますから、教会はユダヤ教とキリスト教に分裂していったのです。ちなみに、この初代教会から第二バチカン公会議までにも、刷新が意に沿わないで自分の足元をすくわれた指導者たちの多くは教会を離れ、分裂していきました。けれども、あるべきは、分裂ではありません。聖霊に従う回心なのです。

只、さっきも言いましたように、いつの時代の刷新にも気を付けなければならぬことは、古い伝統を嫌う人たちが時に誤って陥る落とし穴です。それを譬えてある神父様がこんな言い方をしました。「たらいの水で赤ちゃんを洗った人が、汚れた水だけ捨てたらいいのに、赤ちゃんまで捨ててしまった。」と。古い伝統と言えども、命である本質が必ずあります。それを損なったら刷新の本当の意味がなくなって、元も子もなくなるという話なのです。

イエスは教会を残します。問題は初心を失くしたリーダーたちでした。わたしたちも初心に帰ってみてください。あのころは本当に燃えていたではないですか。しかし、この初心を失くした既存のリーダーたち、彼らの回心をイエスは心に望みながら、弟子のペトロにご自分の羊たちの世話を任せました。教会を残すために大切なのは、羊たちを導く善い指導者だからです。

わたしたちの教会でも、人を選ぶ時、いつも一番心すべきは、何か頭のいい人とか、才覚がある人とか、そういう人ではありません。なによりも、謙遜な人を選ぶことです。

神が与えた権威を誰も変えることは許されません。ペトロのもとに教会は一つにならなければならないのです。ところが現代、神さまを分派の数だけ切り刻んでいるのです。神さまは啓示の中で「わたしの一つの体を皆さんの分派の数だけ切り刻んで、わたしは苦しくてたまらない。わたしを一つに戻してください」と切実に訴えておられるのです。

イエスは語られます。

「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」(マタイ 16・19) と。

ここで、イエスがメシアであることを誰にも話さないように命じられたのは、他でもありません。神さまへの恐れからではなく、神さまに強いられてでもなく、子どものような無心無欲な心を、回心した信仰者としてわたしたちに求めておられるからです。

わたしたちに、ほんとに大切な信仰とは、神さまの前に胸を張って威張れるような立派なことをすることではなくて、神さまの前に、無である自分をわきまえて、無心で欲のない子どものような心になることなのです。

どうぞ、今日ご聖体をいただくとき、聖母マリアさまにこの恵みを共に願いましょう。